

平成二十一年十月

## 長崎くんち・今年のみどり(その二)

越中 哲也

私が本紙に「長崎くんち今年のみどころ」その一」を記したのは昭和五十八年九月である。以来、長崎くんち各町の傘鉾奉納踊の由来、習慣、くんち料理の事などを取りあげ記してきた。

今年の踊町の由来については平成三年発行の「ながさきの空・第三集」と、平成八年発行の「ながさきの空・第八集」にも記している。

**今籠町** 今年の踊町の中で今籠町は戦後二十七年奉納踊を奉納して以来、長崎市の町名変更などの事もあって本年まで五十六年間やすんでおられたが、今年は岸川会長・楠本副会長等が中心となられて旧今籠町地区(現在は長崎市かじや町)の人達に呼びかけられ五十七年ぶりに奉納踊を奉納することになったと言われる。

先日、同町より傘鉾の事について私の処に相談にこられた。と言うのは、同町が戦後に長崎くんちの奉納踊に参加されたのは前記のように昭和二十七年で当時の町内会長は薬師子供会で有名な福田稔先生であられた。当時の長崎くんちは、戦災後のことであり傘鉾を失った町もあり町旗を先頭にたて踊のみを奉納する町が多かった。



昭和6年当時の今籠町傘鉾

今籠町の記録をみると最後に同町の傘鉾が長崎くんちに出場したのは昭和六年(一九三二)とある。今回は当時の写真や手記をみながら酒井彫雅堂さんに復原して戴いた。故林源吉先生の

手記によると同町の傘鉾について次のように記してある。

怒涛砕けて白玉飛散する巖上に翼休むる荒鷲、輪は蛇籠

それでは同町では何故、岩上の鷲を傘鉾に置いたのであるかと言われる。簡単にそれを説明すると「霊鷲山」の物語と解されるとよい。奉納踊は町内の花柳輔芳師匠指導で本踊・秋祭賑諏訪乃獅子舞である。

**元船町** この町は明治三十七年、旧大波止(現在の電車道付近)の前面海岸を埋め丸尾町・玉江町・元船町の三町が造られた。戦後三町は元船町として統一し長崎くんちに参加されている。

今回は同町の傘鉾の「飾」を前回、平成六年くんち参加の時に使用したものを換え、大正五年玉江町が奉納した同地区名物の鉄砲玉(長崎市文化財)を中心に長崎鶴の港の意をあらわした丹頂鶴を配した傘鉾に復したと言われる。奉納踊は昭和二十六年当時同町が「大波止町」の名で奉納していた当時たまたま帰省中の平山芦江先生の考案によってつくられた唐船入港祭を基本にした唐人船が町内子供連中に引かれて登場、そして藤間金彌師匠の指導による異国情緒ゆたかな唐子踊が奉納される。

**上町** 戦前の東中町と東上町の大半が戦後再編成により新たに発足した町であるが同地区は戦災の害も少く長崎の旧態をよく止めている町である。其の故に傘鉾も二〇〇年前の旧東上町の傘鉾が使用され歴史を感じさせる。奉納踊は花柳輔芳師匠の指導で、女人の伊達姿を加えた江戸の吉原を題材に演じられる「紅葉花諏訪伊達競」である。

**鍛冶屋町** この町は大正二年旧今鍛冶屋と出来鍛冶屋の両町が合併して発足した町である。この時の申し合わせで傘鉾は出来鍛冶屋町のもの、踊は今鍛冶屋町伝統の七福神の祝踊にきまつたという。からくり細工の鍛冶屋町の傘鉾は、全国的に有名で二〇〇年位前の製作と言われている。飾は京都三條宗近が伏見稲荷のお使い白狐童子の指導により名剣小狐丸を作る話で、宗近のふりおろす金槌に合わせて童子の顔が狐にかわる所が見せどころである。傘鉾の垂れ幕は七福神のつづ

れ織で今年のおくんの見せどころであると町内の人は自慢にされている。

奉納踊は、子供達中心に曳かれて、七福神の乗りこんだ大きな宝の帆をかけた祝船が踊場に入り込み、子供達の踊りは、やがて船より降りてくる七福神に引きつがれ「めでたし・めでたし」となる。この踊は元船町と同様長崎くんち奉納踊りの本家と言われる藤間流の藤間金彌先生の指導によって今も受けつがれている。

**油屋町** 昔、この町の裏には玉帯川が流れていたのが長崎に入港してくる本船より小船に移された油の小樽は、この町のすぐ裏に積みあげられた。当時油は食料というより毎日の灯として必要の品であった。その故に此の町には豪商が多かった。幕末の頃その豪商の娘に「大浦ケイ」がいた。ケイは坂本龍馬も知っていたという。彼女の説話は多い。そのケイが東京からの帰路、京都に立ちより造らせたのが現在の油屋町の傘鉾であると伝承されている。

傘鉾は白木の三宝に大きな長熨斗をおき、その「のし」押えに金色の宝珠を置くという簡素な中に何か「ケイ女史」の威厳を感じさせるものがある。終戦後、この町は剣舞や本踊を奉納してきたが、昭和四十八年の奉納踊からは町内子供連中の総参加と前記玉帯川の話に因んで川船を奉納し好評を博している。

**筑後町** 昔、筑後町は一六〇〇年頃より大いに進出してきた筑後方面の人達によって、当時すでに形成されていた上町の上部を開いて作られた町であったが次第に町の家数が増えたので、寛文十二年(一六七二)この町を上筑後町と下筑後町に分けている。

現在の筑後町は旧下筑後町と旧西上町の一部が加えられているが、此の地区は全てを原爆により焼失したので、今日ように復興されるまでには地区の人達の長年にわたる御苦労があった事を忘れてはならない。この町が戦後始めて長崎くんち奉納踊に参加されたのは昭和四十八年からであったと言われる。

この町の傘鉾は戦前の下筑後・西上町両町の傘鉾より考案されたもので、神鏡と曲玉、草薙の剣を神木の四方に配するという構図で諏訪社を表現している。奉納踊も長崎名物として評判の龍踊を出されている。龍踊は総勢二百人は必要であると言われる。

### 風信

○九月は何をさておき政界の変動にはじまつた。新政権に大いに期待するものがあるが、其の足腰は大丈夫だろうかと言う人もおられる。(九月七日記)  
○歌人の石橋裕子女史「先日、福岡の国立博物館で奈良興福寺展を見学に行きました。世評に違わず阿修羅像には心うたれて帰りました」と話して下さった。

○佛像と言えは九月は「お彼岸ですね。」

彼岸と言えは其の語源はサンスクリット語のPariman Tram (川むらうの岸)である。一般に我が国ではパラミッタと言ひ、江戸時代の駄洒落に「彼岸会に後家がまいつてハラミッタ」と言っている。

○彼岸とは一般に弥陀の西方極楽浄土を指している。そして其の「お浄土」の姿が、彼岸の中日に大阪四天王寺に行き、夕日の時・寺の西門に立つと遙かに浮んで拝まれると言う。また之の伝承は長崎にもあると砂石集(鎌倉時代)に記してある。其の場所は「我が国・西のはてにある野母(脇岬)の観音寺で彼岸の中日に参拝すると、夕方、寺の山門より遙か海の彼方に西方極楽浄土を拝することができた」と記してある。

○そして秋は何と云っても、お酒が一番おいしいのだそうである。若山牧水の次の短歌は有名である。

白玉の歯にしみとほる秋の夜の 酒はしずかに飲むべかりけり

○そして九月十八日は旧八月一日で昔は八朔(はちさく)と言ひ、白むくの着物をきたと言う。昔の句に「八朔に白むくを着る寒さかな」と言っている。更に旧八月十五日は仲秋の名月である。今年其の日は十月二日に当る。長崎の名月といえは向井去来の句碑が諏訪神社の境内に建っている。その句は「尊とさを 京でかたるも諏訪の月」とある。

○次いで十月一日といえは国指定無形民族文化財長崎くんちのはじまる日である。「くんち」の語源は九月九日という事より始まっている。明治以前の「長崎くんち」は旧暦の九月九日「重陽の祝い日」を中心に旧九月七・八・九日、または九・十・十一日に長崎旧町八十ヶ町、十郷の人達の奉仕によって行われてきた。

